様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１８００１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５７７０１５２

研究課題名（和文）八重山語の焦点辞「du」と疑問文の関係

研究課題名（英文）Interrogatives and the Focus Particle "du" in Yaeyaman

研究代表者
クリストファー　デイビス（Davis, Christopher）

琉球大学・法文学部・准教授

研究者番号：８０６４７３３９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：琉球諸語で広く使われる焦点助辞 du は、特に八重山語では多きな文法的・意味的役割がある。疑問文を中心に研究し、疑問文の構造、 du の役割、そして du と疑問文との関係を明確にした以下の成果をあげた:（１）ｄu が文のどこに使われば、文のどの範囲が焦点されるかという問題について、新しいデータを集めて、理論を立てた。（２）八重山語には、日本語の「か」に相当する疑問助詞がなく、その代わりに du が多くの疑問文で使われるが、その意味的な理由を探って新しい理論を立てた。（３）疑問詞の複数形について調査し、その意味についての理論を立てた。（４）八重山語のデジタルデータを収集し、アーカイブ化した。

研究成果の概要（英文）：The focus particle "du" is found throughout Ryukyuan, and plays an especially prominent role in the grammar of Yaeyaman. This project looked into the syntactic and semantic properties this particle plays in Yaeyaman interrogatives, with the following results: (1) I collected new data on the relationship between the syntactic position of "du" and the part of the sentence that it serves to focus. (2) Yaeyaman does not have a Japanese-style question particle, but instead uses "du" in many interrogatives. On the basis of original fieldwork data, I proposed a theory connecting the semantics of "du" with that of interrogatives. (3) I collected data on plural wh-words, and developed theory of their semantics. (4) I created a large archive of Yaeyaman fieldwork sessions and natural speech.

研究分野：言語学

キーワード：琉球諸語　八重山語　焦点助辞　疑問文　Ryukyuan　Yaeyaman　Focus Particles　Interrogatives

１．研究開始当初の背景

八重山語諸方言の断定文の動詞は接尾辞「N」が付くか否か」で大きく分けることができる。焦点を表す助辞「du」が現れる節は、動詞接尾辞「N」は現れない（伊豆山 2002）。このような相補分布を普段「係り結び」と呼ばれるが、典型的な古代日本語で知られる係り結びと質が違うように思われる（狩俣 2011）。du の意味上の役割は、「焦点」を表すことであると広く思われているが、焦点の対象が文法的にどのように決定されるかは、これまだの研究ではまだ明確にされていない。また、疑問詞疑問文においては、「du」は頻繁に使われ、場合によって義務的である。本研究では、以上の現象の詳細を把握するため、フィールド調査を行い、統語論と形式意味論の観点から分析した。

２．研究の目的

本研究の目的は、琉球諸語の中の八重山地方の諸方言で用いられる焦点辞「du」とそれが使われる構文の意味と構成を明確にすることであった。「du」は断定文にも疑問文にも用いられるが、本研究では特に疑問詞が入る「WH 疑問文」の統語・意味構成と「du」の関係を明確にする目標であった。八重山諸語には共通語の「か」に当てはまる疑問助詞はなく、その代わりに「du」が用いられるように思われる。「du」が入る文は「焦点」と関係があるが、この「焦点」の概念と疑問文の構成とはどの関係があるかを明確するのも目的であった。

これらの目的を以下の４つの目的に分けて行った：

（１）　八重山語における焦点助辞 du の文法的・意味的特徴を探り、その両面の関係を明確にする。この現象を言語学における「焦点理論」に基いて分析しながら、焦点理論の展開を目指す。

（２）　八重山語の疑問文の中に、焦点助辞 du が義務的に使われる場合と随意的に使われる場合を明確にする。義務的に使われる理由を形式意味論の観点から分析し、八重山語の現象について国際学会で発表し、疑問文と焦点との関係についての理論を広げる。

（３）　八重山語の疑問詞には、重複形による「複数形」が広く観察される。疑問詞と du との意味関係を分析するために、疑問詞の複数形の意味論研究も必要となったため、途中から複数形疑問詞を対象にした研究をも行う予定を立てた。その研究に基いて、疑問詞に関する意味論を広げ、これまで研究されていなかった現象についてデータを収集し、分析を行う。

（４）　以上の目的に向けたフィールド調査を録音・録画し、これからの研究と言語継承のためにアーカイブ化する。本研究では、主に宮良方言と竹富方言が対象となり、それらのデータの収集・書き起こし・アーカイブ化を行う。

３．研究の方法

八重山または沖縄本島で、八重山語の母語話者に協力して言語調査を行った。八重山語諸方言の中で、主に宮良方言と竹富方言を対象にした。調査のやり方に、主に以下のようなものがあった：

（１）　日本語の文を訳してもらって、訳した文に基いて、他の言い方があるかを確認した。

（２）　このように集めた文を、どのコンテクストで使えるか使えないかを話者に確認し、その意味的な特徴を確認した。

（３）　自然対話を録音・録画し、母語話者の協力を得て書き起こしを行った。

（４）　自然対話で使われた本研究と関連する構文を探し、その使い方について母語話者と再確認した。

以上のように集めたデータをすべて録音・録画し、ELAN という音声・画像の書き起こしソフトでデータを作成した。

調査の結果に基いて、理論を立て直し、研究成果発表を定期的な発表し、理論上の問題になったところに基いて、また調査でデータを集めた。以上のプロセスを研究成果を上げながら繰り返した。

４．研究成果

主な研究成果には、以下のものがある：

（１）　焦点助辞「du」の統語上の分布と意味範囲について新しいデータを収集し分析した。これまでの研究では、その関係は単純に「du が付く句が焦点される」ように記述されてきたが、本研究では「du」が付く句と焦点される句とが一致しない場合がある事を証明し、その分布を説明する理論を立てた。以下で記入した論文③で

この成果をまとめた。

（２）　「du」の疑問文における意味的な役割を分析し、疑問詞疑問文における「du」が義務的に使われる理由を説明する理論を立てた。「du」による意味上・統語上の働きと、疑問文におけるムードとの関係に基づいた理論を広げ、いわゆる「係り結び」と呼ばれている現象にも関係づけることができた。以下で記入した論文②でこの成果をまとめた。

（３）　本来の研究目的に入っていなかった成果として、疑問詞の複数形の研究も行った。「du」と疑問詞疑問文の関係を調査したら、疑問詞自体の意味論研究が必要となり、疑問詞の単数形と複数形の意味的違いの詳細を探る調査を行った。疑問詞の重複形によって作られる「複数形疑問詞」について調査し、疑問詞の複数形の用法と意味を明確にし、形式意味論の立場から理論を立てた。この研究は、主に竹富方言に基いているものである。これまでの理論でうまく説明できない複数形疑問詞の用法を明確にし、それを説明できる新しい理論を広げた。以下で記入した論文①でこの成果をまとめた。

（４）　これからの研究にも言語継承にも役立つため、多くの自然対話と書き起こしを収集し、文法調査の録音・録画と一緒にアーカイブ化した。今後、協力者の承認を頂いた上でデータの一部をインターネットで公開する予定である。

以上の成果の詳細は、以下のようである：

成果（１）では、du が文のどこで使われていればどの句が焦点の対象となるかを明確にするため、疑問詞疑問文と回答文の中で使われる du の位置を調査した。疑問詞疑問文を使うことによって、回答文の「前提」となるところが設定される。例えば、「誰が来るの？」と聞かれたら、「誰かが来る」という前提を持つ回答文になるはずである。「焦点」は、一般的に「前提」以外の、「新しい情報」となっているところを指すものである。よって、以上の質問に対して「太郎が来たよ」と答えたら、「太郎」が焦点となるはずである。

この例では、疑問文の主語が疑問詞となっていて、そして回答文では主語が焦点となっている。八重山語では、このような疑問文の主語にも回答文の主語にも「du」が付く。疑問文の目的語が疑問詞である場合も、疑問文でも回答文でも目的語が「du」によってマークされる。こんな例を見れば、焦点となる句の後ろに「du」が付くという一般化ができるように思われる。しかし、そうなっていない例もあることを、成果（１）で示した。例えば、以下のような対話では、文全体が新しい情報なのにもかかわらず、du は回答文の主語に付く：

疑問文：どうしたの？
回答文：太郎が[du]二郎を殴った。

また、以下の例では、新しい情報となる句は動詞全体（動詞＋目的語）であるのにもかかわらず、回答文では du が目的語だけに付く：

疑問文：太郎が何をしたの？
回答文：太郎が二郎を[du]殴った。

このように、du の文法上の位置と焦点の範囲が一致しない例を分析して、どのように du の焦点範囲が決定されるかを論じて、論文③でその成果を発表した。

成果（２）では、疑問詞疑問文における du の義務性について論じた。どの疑問詞だったら義務的であり、どの疑問詞だったら随意的であることをフィールド調査に基づいて説明して、その違いに関連する断定文における du のデータも提供した。結果的には、項（argument）となる疑問詞には、du は基本的に義務的にであり、項ではない（non-argument）疑問詞には du の追加が随意的である傾向があることを明確にした。

その理由を説明するために、いわゆる「係り結び」と思われる現象が関わることを提案した。疑問詞疑問文は、「N」のムードを伴うことはなく、常に「N 無し形」の動詞を要求する。その理由として、「N 無し形」のムードが、文の一部を「前提」としてマークする働きがあると仮定して、疑問詞疑問文は常に文のを一部が「前提」となっていなければならない。ムードは節全体に付くため、そのままだと文全体が前提となってしまう。du の機能は、焦点の対象となる句を前提の範囲から取り出すことであると仮定して、疑問詞は常に前提範囲外になければならないので、du が義務的に使われると論じた。

副詞に関しては、du がなくても前提範囲外で解釈できる。これは、断定文の「N 無し形」からもわかることであることを示した。よって、副詞的な疑問詞は、du がなくても前提範囲外での解釈があり得るので、du は随意的であることを指摘した。これらの成果は、学会発表や論文②でまとめて発表した。

成果（３）は、本来の研究計画に入っていない現象ではるものの、成果（２）の展開の中

で、疑問詞自体の意味論研究に入って、八重山語で広く観察される疑問詞の「複数形」に焦点を与えた。複数形は、疑問詞の重複によって派生されるものであり、そのままの「単数形」とでも呼べる疑問詞と対立している。これまでの記述文法や辞書などで、疑問詞の複数形は一応指摘されてはいるものの、その用法の詳細に関する研究はこれまでなかった。

そこで、主に竹富方言に基づいて、疑問詞の単数形と複数形の意味についての調査を行った。その一つの大きな結果として、単数形は「単数」である前提を伴わないし、複数形も「複数」の前提を伴わない。疑問詞に相当するものの数を把握していない場合は、どの形でもよいことがわかった。単数である前提がある場合は、複数形の使用はできない。複数であることが前提となった場合には、複数形の方が好ましいが、単数形を使えないことはない。

こういった単数・複数形の分布を説明する理論を立てて、疑問詞が二つ使われる文（multiple-wh question）の用法についても論じた。これらの調査結果を、形式意味論の「疑問文理論」(theory of questions)と「複数理論」(theory of plurals) と結びつけて、論文①で発表した。

＜引用文献＞

① 狩俣繁久、モーダルのタイプと焦点化助辞、日本東洋文化論集、第 17 号、2011、1-26.
② 伊豆山敦子、琉球・八重山（石垣宮良）方言の文法、消滅に瀕した方言語法の緊急調査研究（１），2002.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計　３件）

① Christopher Davis 、Plurality and Distributivity in Yaeyaman Wh-Questions、Proceedings of the 25th Semantics and Linguistics Theory Conference、査読有、１巻、2015、636-655.DOI: http://dx.doi.org/10.3765/salt.v25i0.3206
② Christopher Davis、The Role of Focus Particles in Wh-Interrogatives: Evidence from a Southern Ryukyuan Language、Proceedings of the 31st West Coast Conference on Formal Linguistics、査読有、１巻、2014、124-133. http://www.lingref.com/cpp/wccfl/31/paper3014.pdf
③ Christopher Davis、 Surface Position and Focus Domain of the Ryukyuan Focus Particle du: Evidence from Miyara Yaeyaman、International Journal of Okinawan Studies、査読有、４巻、2013、29-50.

〔学会発表〕（計　10 件）

① Christopher Davis, Eric McCready、Expressives and Alternatives 、Semantics and Linguistic Theory、2016 年 5 月 24 日、University of Texas at Austin（アメリカ）
② Christopher Davis、Reduplication and Plurality in Yaeyama Ryukyuan Wh-questions、UH Manoa Linguistics Tuesday Seminar、2015 年 9 月 15 日、University of Hawaii Manoa（アメリカ）
③ Christopher Davis 、Plurality and Distributivity in Yaeyaman Wh-Questions 、Semantics and Linguistics 25、2015 年 5 月 15 日、Stanford University （アメリカ）
④ Christopher Davis、Questions about Question Particles 、Workshop on Discourse Particles、2015 年 3 月 28 日、Language Institute, Thammasat University（バンコク）
⑤ Christopher Davis、Focus Particles and Mood in Ryukyuan: Evidence from Miyara Yaeyaman、UH Manoa Linguistics Tuesday Seminar、2013 年 9 月 17 日、University of Hawaii Manoa（アメリカ）
⑥ Christopher Davis、Focus Particles, GIVENness, and Wh-Questions in a Southern Ryukyuan Language 、International Conference of Linguists、2013 年 7 月 25 日、Geneva（スイス）

〔図書〕（計　０件）

〔産業財産権〕
○出願状況（計　０件）

○取得状況（計　０件）

〔その他〕
ホームページ等
http://cmdavis.org

６．研究組織
(1)研究代表者

クリストファー　デイビス（DAVIS, Christopher）
琉球大学法文学部
准教授

研究者番号：８０６４７３３９